東北女子大学　紀要　No.58：81 ～ 84　2020

生活技術の定着と家庭科教育の課題

葛西　美樹*・工藤　寧子*

Adoption of life skills and challenges for home economics education

Miki KASAI*・Yasuko KUDO*

Key words：家庭科教育　home economics education
生活課題　task on living
家庭教育　home education
質問紙調査　questionnaire survey

１．序論

近年、暮らし方や価値観に変化が生じ、家事の外部化や消費形態の変容がみられる。そのため、小・中・高等学校の家庭科教育で取り扱う内容や題材も現在の生活の営みに合った内容にすることが求められている。「第５回学習基本調査」報告書（2015）[1] によると、「小学生が好きな教科」の第一位として家庭科が挙げられ（90.2％）、中学校では、技術・家庭が第二位（59.5％）と上位にランキングされている。「家庭生活に関わる意識や高等学校家庭科に関する全国調査」(2016) [2] において、「家庭科を学んでよかった」「どちらかというと学んでよかった」と考える社会人は約95％ [3] と高い値を示し、家庭科教育と日常生活との関連が予測される。

そこで、高等学校までの家庭科学習を終えた大学生の現状を把握するため、家庭科で学習した知識・技能が家庭生活で活用されているのか調査をする。また、地域により環境の違いが家庭生活活用度に反映するのか、既存データと比較し考察する。

２．既存データ

既存データは、「日本学術会議健康・生活科学委員会家政学分科会，家庭科及び家庭科教員養成に関する調査―これからのくらしに家政学が果たすべき役割を考えるために―，2014.8」[4] を使用した。調査概要は以下の通りである。

時期：2013 年 9 ～ 10 月
対象者：学部１～２年生を主
調査方法：質問紙を用いて、講義内の約 10 分間で回答
標本数：回答数 740 件、有効回答数 684 件（94.8％）
調査内容：下記に示す計 24 項目

衣生活関連の技と知識　８項目
ボタンの補修、針と糸のほころび直し、ミシンで縫う、靴下の洗濯、表示を見て洗剤を選ぶ、表示の意味がわかる、織物と編み物の違い、衣服サイズ表示の理解

食生活関連の技と知識　８項目
ご飯の炊き方、カレーの作り方、食器の洗い方片付け方、クッキーの作り方、茶碗蒸しの作り方、栄養を考えた食事のとり方、栄養素の名前と働き、生鮮食品の選び方

住生活関連の技と知識　８項目
間取り図の書き方、風通しや採光の良い家具の配置、整理整頓の仕方、掃除の仕方、防音を考えた工夫、省エネを考えた暖房の仕方、地震に備えた家具の配置、近隣の接し方

＊東北女子大学

３．Ｔ大学調査

家庭における生活活用度について、地域により違いがあるのか既存データの質問紙を用いて、Ｔ大学の学生を対象に調査を実施した。

調査時期：2018 年 1 月

調査方法：質問紙を用いて、約 10 分間で回答

調査内容：既存データと同一の質問内容 24 項目

調査対象：青森県Ｔ大学小学校教職課程履修者 37 名

調査結果：

『衣生活関連の技と知識の活用度』

「活用している」割合が 80％以上である項目は、「ボタンの補修」のみであった。「知らない」割合が 40％以上の項目では、「衣服サイズ表示の理解」「織物と編み物の違い」の 2 項目であった。

『食生活関連の技と知識の活用度』

「食器の洗い方片付け方」「ご飯の炊き方」「カレーの作り方」「生鮮食品の選び方」の項目で「活用している」割合が 80％以上であった。「知らない」割合が 40％以上の項目はなかった。

『住生活関連の技と知識の活用度』

「掃除の仕方」のみ、「活用している」割合が 80％以上であった。「知らない」割合が 40％以上の項目は、「省エネを考えた暖房の仕方」「防音を考えた工夫」「間取り図の書き方」であった。

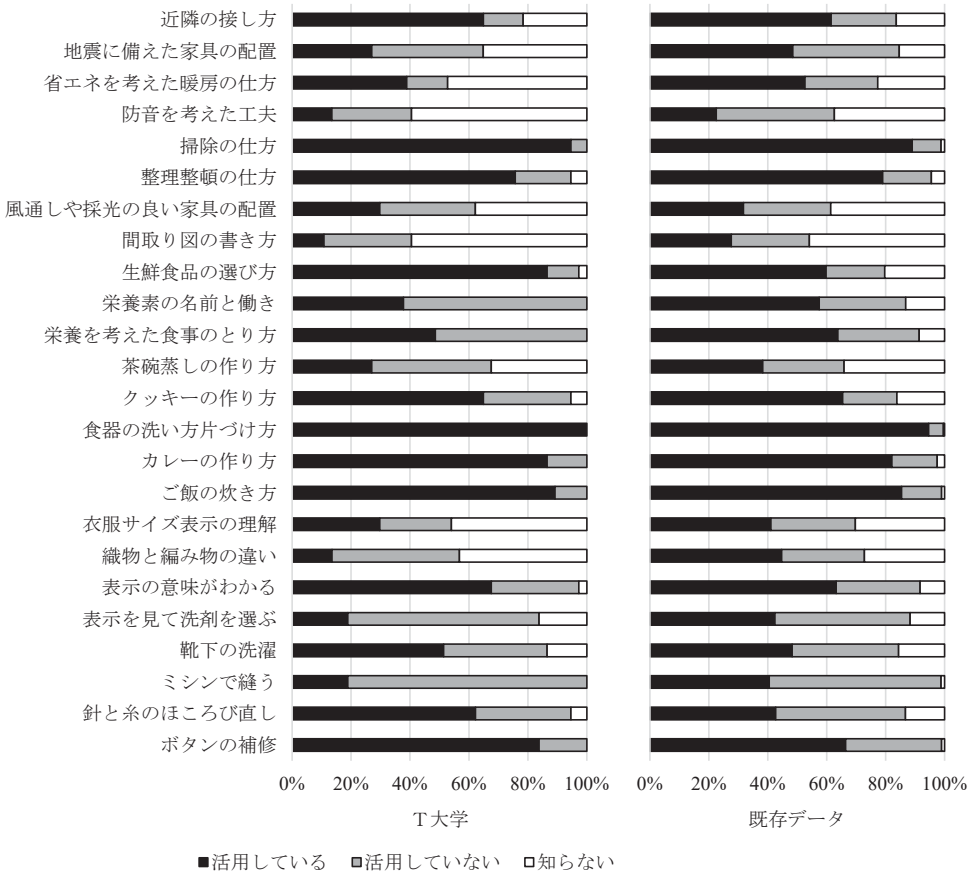

図１　衣・食・住分野の技と知識の認知度および活用度

４．既存データとＴ大学調査との比較

［共通事項］

衣生活分野では、「活用している」割合が80％以上の項目が既存データにはなかったが、60％以上で比較すると「表示の意味がわかる」「ボタンの補修」の２項目において共通性がみられた。この2項目は小学校領域の学習内容であり、特に「表示の意味がわかる」では、家庭用品品質表示法に基づく繊維製品品質表示規程の改正[5]に関わる議論が長い年月をかけて行われて来たため学びが印象深かったことも考えられる。

食生活分野では「食器の洗い方片付け方」「ご飯の炊き方」「カレーの作り方」の３項目で80％以上が活用していた。特に「食器の洗い方片付け方」の項目では、Ｔ大学の学生全員が「活用している」と回答した。学生が活用していることから、今後も家庭科教育において上記の項目は、生活の営みに必要な技能・知識であると推察される。

住生活分野では「掃除の仕方」が活用されており、既存データ89.0％、Ｔ大学94.6％で、Ｔ大学は「知らない」と回答した学生は０％だった。「防音を考えた工夫」では「活用している」割合がＴ大学で13.5％、既存データで22.5％、「間取り図の書き方」はＴ大学で10.8％、既存データで27.6％、と多少の差はあるが全般に活用度が低かった。「防音を考えた工夫」「間取り図の書き方」は、中・高等学校の学習内容である。新学習指導要領では、「防音を考えた工夫」は小学校での学習内容となるため、今後活用度に変化があるかみる必要がある。

［相違事項］

既存データでは、24項目すべてにおいて「知らない」学生がいるのに対して、Ｔ大学では「ボタンの補修」「ミシンで縫う」「ご飯の炊き方」「カレーの作り方」「食器の洗い方片付け方」「栄養を考えた食事のとり方」「栄養素の名前と働き」「掃除の仕方」の８項目において、「知らない」と回答した学生が０％で違いがみられた。

既存データと比較してＴ大学の「知らない」割合が多い項目は、住生活分野では「防音を考えた工夫」「省エネを考えた暖房の仕方」「地震に備えた家具の配置」の３項目が挙げられた。特に、Ｔ大学は「防音を考えた工夫」を「知らない」割合が59.5％に対して、既存データでは37.4％と違いがみられた。１住宅当たりの持ち家住宅の述べ面積は全国平均が122.3 m^2であるのに対し、Ｔ大学の所在地の青森県は150.1 m^2（2013年）[6]と広いことから、居住空間と防音を考えた工夫に影響する可能性がある。

「活用している」割合がＴ大学で高い項目は「ボタンの補修」83.8％（既存データ66.4％）、「生鮮食品の選び方」86.5％（既存データ59.8％）であった。Ｔ大学が「ボタンの補修」を「活用している」割合が高い理由の１つとして、制服がありブラウスなどボタンの付いている洋服を日常生活で着用しているためと推察される。

既存データと比べＴ大学で活用度の低い項目は、衣生活分野では、「ミシンで縫う」18.9％（既存データ40.5％）、「織物と編み物の違い」13.5％（既存データ44.7％）、「表示を見て洗剤を選ぶ」18.9％（既存データ42.4％）であった。住生活分野では、「地震に備えた家具の配置」27.0％（既存データ48.5％）であった。東日本大震災など災害が多数発生しているが、活用度が低かった。

５．総括

調査対象となった全大学生は、住生活分野の技と知識の定着度不足がみられた。特に「間取り図の書き方」など高等学校の学習内容の活用度が低い結果となった。一方、「掃除の仕方」「整理整頓」など小学校で学習する内容は活用度が高かった。

また、「ボタンの補修」「ご飯の炊き方」「食器の洗い方片付け方」など小学校の学習内容は家庭生活に活用される傾向があり、衣・食・住の偏りがなく生活技術と知識の定着がうかがえた。

先述の調査[1]の好きな教科ランキングで家庭科が小学校では第一位、高等学校では９教科中第八位（44.8％）であったことから、「家庭科」は児童生徒が好んで学習することが生活活用度を促す

と推測される。

さらに、平成29年に告示された学習指導要領の改訂にあたり、発達段階に応じた小・中・高等学校の内容の系統性および空間軸と時間軸という学習対象の明確化が行なわれた[7]。時間軸では、小学校は「現在・これまでの生活」、中学校は「これからの生活」、高等学校は「生涯を見通した生活」と、指導内容を整理した。この時間軸と調査結果に関連性がうかがえた。小学校の学習内容は、掃除の仕方など、自らの日常生活に直結している。また、できなかったことができるようになる喜びから達成感が得られ相乗効果をもたらし、好き・活用度につながった。また、小学校での学びの成果が浸透しているとも言えるだろう。一方、高等学校の学習内容（間取り図の書き方など）は、生涯を見据えているため、高校生にとって実感が伴いにくく、自分のこととして学ぶ意義を見いだせないことが考えられる。そのため、多くの大学生が「知らない」「活用していない」と回答したと思われる。

このことから、教師は、生活技術と知識の定着を高めるために、生徒自身が生涯を見通した視点と課題意識をもち、主体的に学習することをねらいとした教材の研究をすることが求められる。

住生活分野の「防災」「防音」については地域の特性がみられた。空間軸と時間軸の観点から、生涯を見据え、児童生徒自身の居住地域以外の事象も積極的に授業に導入していくことが必要である。

今後は、家庭科で学ぶ24項目の内容が、実際に家庭科教育で学び得たのか、或いは家庭学習により得た知識・生活技術によるものか、調査・検討していきたい。

引用文献・参考文献

1）ベネッセ教育総合研究所,「第5回学習基本調査」報告（2015）, https://berd.benesse.jp/shotouchutou/research/detail1.php?id=4862, 2019.10.31

2）日本家庭科教育学会，未来の生活をつくる ―家庭科で育む生活リテラシー―，明治図書出版株式会社，2019

3）日本家庭科教育学会，未来の生活をつくる ―家庭科で育む生活リテラシー―，明治図書出版株式会社，2019，p.31

4）日本学術会議健康・生活科学委員会家政学分科会，家庭科及び家庭科教員養成に関する調査 ―これからのくらしに家政学が果たすべき役割を考えるために―，2014

5）消費者庁，家庭用品品質表示法, https://www.caa.go.jp/policies/policy/representation/household_goods/, 2019.11.18

6）青森県企画政策部企画調整課，平成29年度版 よくわかる青森県，2018

7）文部科学省,教育課程部会　家庭・技術，家庭ワーキンググループ（第7回）, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/065/siryo/1372128.htm，2019.11

8）文部科学省，小学校学習指導要領（平成29年告示）解説　家庭編，2018

9）文部科学省，中学校学習指導要領（平成29年告示）解説　技術・家庭編，2018

10）文部科学省，高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説　家庭編，2019

11）文部科学省，小学校学習指導要領解説　家庭編（平成20年），2008

12）文部科学省，中学校学習指導要領解説　技術・家庭編（平成20年），2008

13）（一社）日本家政学会　被服構成学部会，日本家政学会　被服構成学部会誌　第39号，株式会社アディス，2018